徳大のおたから

徳大のおたから
徳大のおたから
徳大のおたから

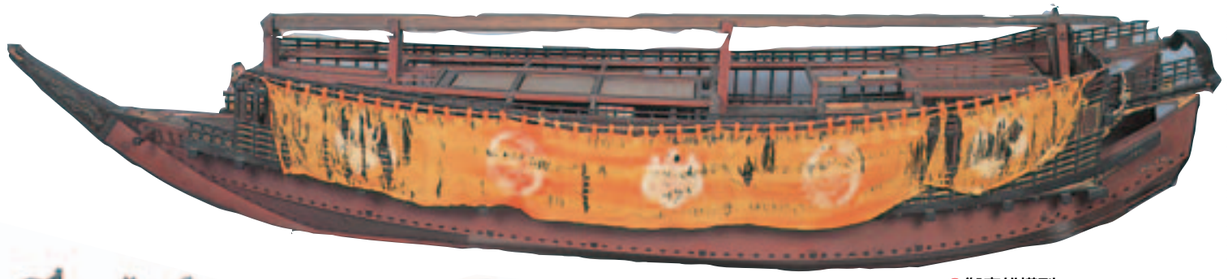
徳島藩御座船模型二艘

徳島城博物館・主任学芸員
須藤 茂樹 すどう しげき

本学に所蔵されている船模型二艘は、天保12年（1841）2月に藩の船頭や水主たちによって藩主へ献納され、ついで蜂須賀家の崇敬厚い氏神国瑞彦（くにたまひこ）神社に奉納されたものです。徳島藩御座船を精巧に写したもので、藩の船大工の手になるものと思われます。

一艘は、海御座船で、至徳丸といわれていますが、はっきりしたことはわかりません。桐紋や稲丸紋を白抜きした幕や旗・幟など付属品も備わっています。船体を朱塗や黒塗にするのは原則として御座船に限られていました。全長は252・2㎝、幅は5・7～5・0㎝です。

もう一艘は、従来川御座船とされてきましたが、川御座船に見られる水押上部を平にとる形式ではなく、また帆柱が立つようになっていることなどから、海で使用する御召小早とすべきでしょう。船名は船額から龍王丸であることがわかります。全長は195・3㎝、幅は51・0㎝です。屋形の板戸には蜂須賀家の定紋丸に左万字紋や枝垂れ柳・蜘蛛の巣を、櫓垣立後部には軍配と団扇をあしらっています。貞享年間（1684～8）の船のリストには、御座船八艘、御召小早七艘とみえます。大坂に向けて御座船を中心に五十艘前後の大船団が出航する姿は、まさに海の大名行列といえるでしょう。［総合科学部所蔵］



◎御座船模型

◎御召小早模型

浅葱糸素懸威五枚胴具足 頷

（あさぎいとすがけおどしごまいどうぐそく）

徳島藩中老家伝来とされる甲冑です。徳島の古美術の流通に詳しい人の談によれば、尾関家の伝来と考えられそうです。

兜は、六十二間筋兜に半月の前立を付け、吹返には蛇の目紋を据えています。大ぶりな袖、重厚な面頬（めんぼお）、そして籠手（こて）、佩楯（はいだて）、臑当（すねあて）を具備しています。指揮具である采配、陣羽織が付属しています。この具足は江戸時代の作ですが、信吉作の胴と極めた文化元年（1804）8月の増田明珍宗邦の折紙と信行作の面頬と極めた文政10年（1828）2月の増田明珍宗胤の添状（折紙 一種の鑑定証）が附属しています。

徳島の場合、昭和20年の空襲によって、江戸時代の徳島城下にあたる区域が焼失したことと、北海道移住など県外に移った旧藩士が多いことなどから、県内には藩士の甲冑がほとんどなく、本学所蔵の上級家臣の着領として貴重な遺品といえます。

本学には、ほかにも御貸し具足などに用いられた黒漆塗左万字紋入腹巻や黒漆塗畳具足などが所蔵されており、貴重な武具コレクションといえます。かつて蜂須賀家は、黒一色の具足や旗を用いたことから、「阿波の黒鴨」と恐れられたといわれています。［総合科学部所蔵］

◎浅葱糸素懸威五枚胴具足

◎陣羽織 前

◎陣羽織 後

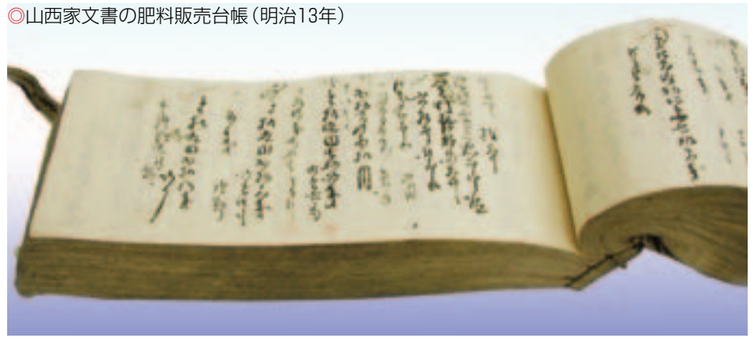
◎添状

日本経済史の一級史料 山西家文書

総合科学部人間社会学科
人文科学講座
桑原 恵 くわばら めぐみ

山西家文書は、撫養（現在の鳴門市）で廻船問屋を営んでいた商家の史料です。江戸時代には、藩の専売品である塩や藍は、江戸や大阪に運ばれて売られていました。山西家はそのような専売品を江戸などに積み出して売りさばく廻船問屋として活躍しました。山西家の隆盛は、18世紀中頃から始まり、明治時代まで続いています。取引先は、北は北海道から南は九州まで、全国に及びます。史料も江戸時代から明治期のものまであり、内容を分析することで、江戸時代の全国的な流通のあり方が明治期にどのように変化していくのかについて知ることが出来ます。日本史の貴重な史料として、すでに多くの経済史の研究者に利用されています。現存している山西家文書の半分は、東京にある国立国文学研究資料館に保存されており、本学に寄贈されているのは残りの半分にあたります。

山西家文書は、日本の19～20世紀の全国的な市場のあり方を私たちに示してくれます。同時に、江戸時代から明治期にかけて、徳島が全国的な市場とどのように結びついていたのか、そして徳島がどれほど経済的にも繁栄していたかについても教えてくれます。山西家文書は日本史の史料として全国の近世史研究者にとっての「おたから」であるだけでなく、徳島にとっても大切な「おたから」なのです。［附属図書館所蔵］



◎山西家文書の肥料販売台帳（明治13年）

家臣の系譜を知る史料 蜂須賀家家臣団成立書

「蜂須賀家家臣団成立書并系図」は、江戸時代に徳島と淡路島を支配していた大名である蜂須賀家が、すべての家臣に対して、それぞれの家の系譜を書き上げさせたものです。天保5年（1834）に作成され、その後文久元年（1861）に書き継いで提出され、中には明治2年（1869）にさらに書き継いで提出されたものもあります。家譜を提出した家臣は、家老などの重役から無足人と呼ばれる下級の家臣まですべてです。そのうち重役の家譜にあたるものは藩主個人の家に所蔵されて現在に至っており、下級家臣の部分は国立国文学研究資料館に所蔵されています。したがって、本学の附属図書館に所蔵されている史料は、最上級の家臣と下級の家臣を除く家臣団の家譜ということになります。その意味では、中心的な家臣団たちの家の系譜を知ることが出来る史料なのです。

内容としては各家の初代が誰で、どこの出身であるかを始め、いつ頃からどのような役職を勤めたか、拝領した禄高や養子となって当主となったものの実父が誰か等、様々な情報が詳細に書き記されています。また、各家の家譜の記述の最後には系図が付けられ、その後には家紋が描かれています。このように、この「成立書」は、江戸時代の徳島藩の家臣に関する貴重な情報が記録されたもので、藩政に関する研究や地域史研究など、多岐に亘って利用価値の高い史料です。［附属図書館所蔵］

◎系図と家紋の記載部分

◎家臣団成立書表紙部分

埋蔵文化財調査室
定森 秀夫 さだもり ひでお

掘り出された「おたから」

徳島大学は遺跡の上に立地しています。校舎新築などで地下に眠る文化財が破壊される場合、埋蔵文化財調査室が事前に発掘調査を行い、遺跡の記録保存を行います。

弥生時代前期の大集落であった庄・蔵本遺跡では、環濠発見など重要な成果を挙げ、弥生時代の土器・石器・木器が大量に出土しています。写真1は**弥生時代前期の典型的な壺と甕**です。

江戸時代の中下級武士が住んでいた常三島遺跡では、徳島藩初期船置所関連の船入状遺構などを発見し、陶磁器・金属器・漆器が大量に出土しています。写真2は**「元文一分金」**（1.6×0.9㎝）で、徳大構内遺跡からは3点しか発見されていない希少なものです。

上級武士が住んでいた新蔵遺跡では、江戸時代後期の庭園遺構を発見し、大量の陶磁器類が出土しています。写真3は、肥前有田産の**染付芙蓉手花鳥文大皿**です。本来はヨーロッパ向け製品でした。13寸皿（径39.8㎝）の出土は全国的にも希少な例となります。

埋蔵文化財調査室では、これらの出土品を単なる「おたから」としてではなく、教育・研究・展示などに活用していくとともに、地域史復元に寄与していきたいと思っています。

◎[写真1]弥生時代前期の壺と甕

◎[写真3]染付芙蓉手花鳥文大皿

◎[写真2]元文一分金

薬学部長
高石 喜久 たかいし よしひさ

青春を刻む青石

蔵本キャンパス西門脇に長井記念ホールがあります。その西側に長井長義博士の銅像があります。薬学部玄関には「1866年11月長井長義はこの石を踏み長崎へ旅立った」と書いた銘文と青石があります。薬学部からは長井博士の「おたから」を紹介します。

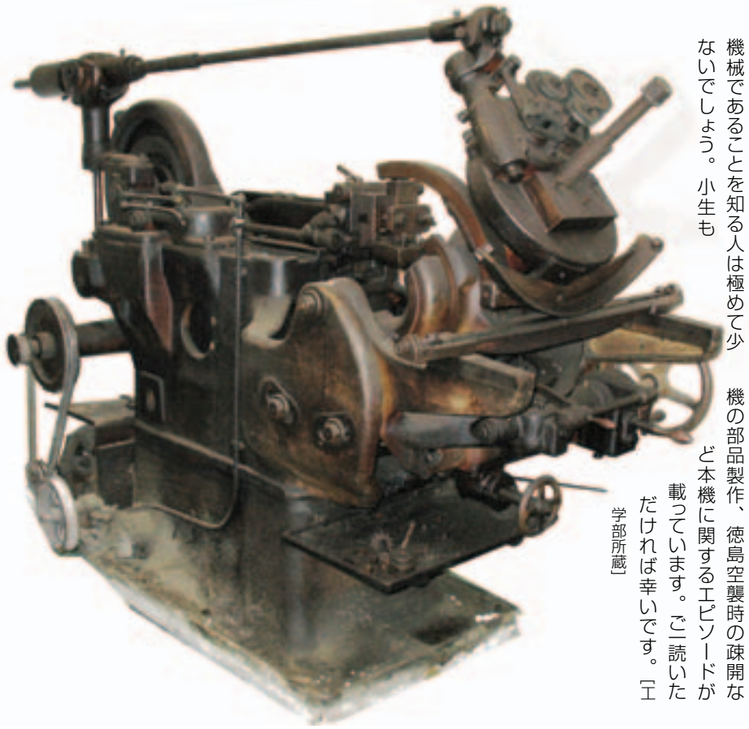
薬学部の創設には、徳島の生んだ薬学の開祖長井長義博士と地元の薬業界の人々の尽力がありました。このことから薬学部は長井博士の功績をこれまで顕彰して来ました。1999年、日本薬学会年会が徳島で開催されたのをきっかけに長井長義資料委員会を設置、本格的に先生の資料収集を開始、常設展示室も開設しました。2004年には長井家から数多くの遺品が大学に寄贈されました。これを含め現在保有している「おたから」は、発見当時のエフエドリンの結晶、長崎留学時代の日記原本、わが国最初の博士学位記、数多くの勲章・勲記・手紙・写真等、数え切れない程の資料があります。

これら資料は幕末・明治・大正を、志を高く持ち、誠実に、堂々と生きた徳島が生んだ偉人の生き様を物語るもので、学生達にその志を感じて頂きたい「おたから」群です。その中でも薬学部玄関に設置した青石を「おたから」の第一に挙げたいと思います。この石は、博士が長崎に旅立つ時に踏んだ石で、日本に於ける薬学の夜明けがこの石から始まったと言っても過言ではありません。大学を巣立ち行く若者が、この石を踏み、青雲の志を持ち、世界の薬学の発展に貢献をすること祈念した、私達の現在の「おたから」です。[薬学部所蔵]

◎薬学部玄関に設置されている青石とその銘文
いつの日か新たな銘文がここに設置されることを期待しております。

大学院
ソシオテクノサイエンス研究部
材料加工システム講座
升田 雅博 ますだ まさひろ

ドイツ・ライネッカ社製の歯切り盤



この機械は、傘歯車の歯切り実習に1970年代まで使われていましたが、モータの直接制御などで歯車の使用頻度の減少とともに活躍の場を少なくしました。ところで、本機が開学当初にドイツから直接購入され、歴史を語る事例に登場する工作機械であることを知る人は極めて少ないでしょう。小生もまた昭和57年に退官された賀勢晋先生（本学名誉教授）の最終講義を拝聴するまで全く知りませんでした。幾度か処分の声が聞かれましたが、本学歩みの唯一つの証しである気がして残してもらっています。先生の回想記「常三島界隈48年」には戦闘機の部品製作、徳島空襲時の疎開など本機に関するエピソードが載っています。ご一読いただければ幸いです。[工学部所蔵]

医学部保健学科機能系検査学
齋藤 憲 さいとう けん

1㎷真空管式直記型心電計

保健学科では米国サンボーン社製の真空管式直記型心電計（Model-51）を保管しています。心電計は今から百年余り前に、オランダのアイントーフェンという人により開発されました。当時の心電計は弦線心電計と呼ばれ、ピアノくらいの大型の装置でした。その後、

機器の小型化が進みましたが故障が多く、現像式のため肝心なときに心電図が撮れていないということもありました。昭和30年頃に徳大病院で購入した本心電計は、真空管式という懐かしさもありますが、熱ペンによる直記型でリアルタイム解析ができる当時は画期的な機種であり、後世の国内の心電計開発の礎となりました。価格も破格で、大卒の初任給が1万2千円余りの時代に約47万円もしたそうです。[医学部保健学科所蔵]

大学博物館のある風景

総合科学部人間社会学科
人文科学講座
東潮 あずま うしお

この数年、全国的に大学博物館が設置されつつあります。大学博物館は大学の研究・教育の知的生産を表現する場です。

これまで中国や韓国の大学博物館をたびたび訪れ、大学に博物館があればといつも思っていました。韓国では大学に博物館の設置が義務づけられ、大学内の諸施設として、図書館とともに大学の研究、教育の知的財産を象徴しています。

2005年、アメリカのハーバード大学やドイツ・ベルリン自由大学で国際シンポジウムがあり、発表する機会がありました。ハーバードではイエンチン（燕京）研究所（鳥居龍蔵はかつて北京の燕京大学客員教授）、自然史博物館、ビーボディ博物館（民族学・考古学）、サックラ美術館などいくつもの専門博物館があり、市民に開放されています。なによりも学生の教育の場として、キャンパスとともあって存在しています。国内でも北海道大、東京大、京都大、鹿児島大などに総合博物館がつくられています。

昨年来、「ガレリア新蔵」は、大学の顔としてうまれつつありますが、それが常設展示でないことがおしまれます。徳島大学に総合研究博物館をつくり、そのギャラリとしての機能をはたすこともできればと思います。

教育・研究の場としての大学に、大学史を表象する博物館の存在する意義ははかりしれません。開かれた大学として、地域に貢献することができるでしょう。

本学に「人材」はいます。そして、開学以来各学部にぼうだいな各種の研究資料が蓄積されてきています。大学人がつくりだしたものです。

大学博物館には研究資料を保存する役割もあります。いま各学部で貴重な研究資料が消失しつつあります。資料のデジタル化もふくめ、各学部、図書館、高度情報化基盤センター、埋蔵文化財調査室などと連携して保管し、展示・公開してゆくことができます。

将来は、博物館には収蔵・保管部門とともに、調査研究部門（学内埋蔵文化財発掘調査、海外学術調査、共同調査）を設けての学際的な研究、生涯学習教育部門で市民講座などの科学教育などをおこなうことが望まれます。

まずは大学に博物館機構を！